

2021年8月15日（日）／説教者：國分美生

説教：「見つけたら一緒に喜ぶ」

聖書：ルカによる福音書15：8～10

この譬え話は、古くから一般的に教会共同体から外れてしまった罪びとが、回心して再び教会に戻ってくることの喜びとして読まれてきたと思いますが、よく考えると銀貨自身が罪を悔い改めているわけではありません。イエスが本当に伝えたいことは「罪びとの回心」なのでしょう。

失くしたドラクメ銀貨1枚は羊一頭とほぼ同じ価値で、当時の女性の二日分の賃金にもなりました。当時貧しい家に窓は一つしかないので、探し物をするには昼間でもランプを使います。当時女性たちにとって、銀貨一枚をなくす、ということは自分に任せられた責任に関わる大問題でした。自分にとって大切なものをなくしたら、苦勞して熱心に、見つけるまで探す、そして見つけたら共同体の仲間と一緒に喜ぶ・・・それがこの譬え話のテーマです。

誰しもが共同体の中で生きています。教会、家族、職場、学校…等々。それらは単なる仲良しグループではなく、そこに属するメンバーがそれぞれが困難な時に支え合ったり、うれしい時に一緒に喜んだりする関係を築いていく場所。一つの目標に向かって、協力・支え合う集まりです。この譬え話から、たとえ一枚でも大切な銀貨を失くしたら、決してあきらめず、置き去りにされていた人を探し出し、共同体へ復帰させ、共同体のみんなと一緒に喜ぶ神の姿が浮かび上がります。それは神の国の祝宴のイメージです。

紀元前一世紀、ローマ帝国の支配下にあったユダヤ人たちの生活は非常に苦しく、過酷な支配によって人々は分断されて、先祖から引き継いできた共同体も危機に直面していました。言ってみれば「一緒に喜ぶ」ということが出来なくなっていた状態です。その時、神の国の祝宴の希望を共有するのが共同体であり、そのような共同体であるからこそ大きな力に抵抗することが出来るのだ、とイエスは伝えようしました。私たちが共同体の中で希望を共有し、それをいつも確認し合うこと、それが暴力的な大きな力に対する抵抗となるからです。

教会は「神の国のかけら」を見出す場所ですが、私たちは教会以外の共同体の中にもイエス様が共におられることを感じる時があります。それぞれが一週間の旅をする間に、そこで希望を見出し大切に携えて、そしてまた主日に教会で分かち合い、喜びを共有したい。誰一人失われたままにはならないで、神の子どもたちが皆一緒に食卓を囲めるように招き続けている神に信賴するからです。(國分美生)